

ほんところ

📖 本と珈琲と土浦 ☕

Vol.1

一冊の本、一杯の珈琲、何てことない一日を集めていくと
かけがえのない土浦のまちが見えてくる

古本と珈琲と亀城公園

昼過ぎに職場を出た。土浦駅前、十二時半。まだお腹も空いていない。降って湧いたような半休だから、午後の予定は何にもない。足は自然と「つちうら古書倶楽部」に向いた。

そこは、「常設の古本市」という風情の巨大な古本屋だ。元はパチンコ店のホールだったそうで、入り口から最奥が見通せないくらいだ。だって広い空間に、所狭しと古本が並べられている。もとより、整然とした書架から目当ての一冊をサツと選ぶような店ではない。ざっくりとジャンル分けされた棚や、「島」を形成している古書店ごとのカラーを頼りに、圧倒的な物量を掻き分け、良書を探す。文字通り「漁書」の気分である。

今日の釣果は、出久根達郎『最後の恋文』。短い随筆を集めたもので、「三月書房小型愛蔵本シリーズ」の二冊だ。文庫サイズながら函入り・ハードカバーという、可愛らしくもどこか生真面目さを感じさせる、好ましい叢書である。「家に帰れば積ん読の山があるのに」と思いつつ、出先でつい欲しくなるのはこういう本だ。

心に染む一冊を抱えて店を出ると、春らしく生暖かい風が頬を撫でた。今すぐ、この

本を開いて冒頭の数篇を読んでみたい気持ちになった。紙袋越しに函の感触を感じながら、駅前通りを歩くこと十分。亀城公園のベンチに腰を下ろす。遠くから、小学生が校庭ではしゃいでいる声が聞こえてくる。そういえば、と思い出して、鞆から魔法瓶を出した。まだコーヒーが半分残っている。ひと口啜る。真紅に型押しされた題字部分を指の腹で撫でる。もうひと口。クリーム色の表紙を開くと、遊び紙が濃緑、朱色の二枚。出久根は茨城県出身、元古本屋主人ということでは、こちらから勝手に親近感を抱いている。出久根の随筆は昭和の風情を伝えるものが多いが、同時代を生きたことがない自分をすら「ああ、昭和はそうだった」とノスタルジックな気分させる。疑似体験であつても、ノスタルジーは快感である。

五、六篇読んだあたりで、コーヒーが尽きた。少し日が翳ってきたのか、肌寒くなってきた。そういえば、そういえば、お腹も空いてきた。福来軒のラーメンでも食べようかな。本と魔法瓶を鞆に放り込む。立ち上がって、ウー

松本さんの珈琲哲学と食の図書館

語り手 松本正
聞き手 稲葉大沼

土浦駅から車を走らせて5分。急な坂道を上ると、オレンジ色の看板が顔を出した。カランカラン。焙煎された香ばしい珈琲の香りが鼻をくすぐる。今回は自家焙煎珈琲専門店、ニコニコ珈琲の松本正さんにお話を伺った。

土浦生まれ、土浦育ち。そんな松本さんが「あつたらいいな」と願うのが「食の図書館」だ。「食の図書館」とは、飲食店のオーナーが読んできた本を紹介するコーナー。お客さんは本を手取ることで、その本をセレクトしたオーナーの「人物」に興味をもち、お店に来店するきっかけとなる。一方、オーナー自身にとつても、カフェのマスターやレストランの料理人たちがどんな本を読んでいるのか？を知ることで、インスピレーションの源になりうる。「今の時代は簡単に資格などをとることのできる時代だが、専門分野に関してそれぞれの店主がもっと勉強する必要がある。」本質が何より大事。『食の図書館』があることで、店主が自店舗のメニューや自分のお店に

向き合う場として機能するとよい」

そう語る松本さんは、コーヒーに対しても「本質」を大切にしている。ある日のこと、暮れなずむ窓際の席に、スーツ姿でパソコンとらめっこする一人の男性がいた。しかし、コーヒーに口を付けた瞬間、ハツとしたように顔をあげる。そして、そこではじめて目の前に広がる茜色した細長い雲が色づいた西空に気づく。「おいしいコーヒーを飲むと、まず人は体で反応する。『あつおいしい！』という感嘆符をとることで、一旦目の前のことから離れて外の景色をみるようにふと我にかえる。コーヒーの力でいかに「崩せる」か、『あつ！』となるコーヒーの入れ方を常に研究している」声にならない「感嘆符」、それがカフェのマスター冥利に尽きる瞬間である。その「感嘆詞」づくりは、一杯ずつ丁寧に入れるネルドリップから生み出されている。松本さんはネルドリップの魅力を伝え普及させるため、全日本ネルドリップコーヒー協会を設立。ハンドドリップのセミナーや、「土浦ネル」の開発も行っ

ているのだとか。「土浦ネルをフランスのカフェに発信していきたい」、そんな熱い思いがある。

司馬遼太郎の愛読者である松本さんは、簡潔で語りかけるような文体が好きで、自分が本を書く時ついで意識すること。「となりでおじさんが話している感じ。言葉が効果的に使われており、説明しないところがよい」司馬遼太郎を読み始めたきっかけは合気道だという。「ハンドドリップは所作も大切で、合気道に通じるところがある。体の全身を使って入れることでのむ人にぬくもりが伝わる。コーヒーでも合気道でも常に本質を求めており、表面に現れずとももたらされる機能美である」それが、松本さんのコーヒーに対する本質であった。



そこから先は田んぼが広がり、ザリガニ釣
りやイナゴ取りで遊ぶ。街外れにあった住宅
地に私は育った。家から最寄りの書店までの
道のりは、自転車で15分ほど。途中、踏切を
越え、土手沿いを走り、薄暗いガード下をく
ぐつて、ボタンを押して国道をわたり、駅に着
く。書店は、その隣にあった。

小学生のころ、親に頼んで買ってもらった
一冊の本が『大どろぼうホツェンプロッツ』。
片手にピストル、片手にサーベル、腰に7本の
短剣という出で立ちは、見るからに悪党。あ
る日、廻すと音楽が流れるという珍しい
「コーヒーひき」をおばあさんから奪い取る。
少年たち二人がこれを取り返しに奮闘する
という物語。

この本を読んだ頃、私はまだコーヒーを飲
んだことがなかった。初めてその機会が訪れ
たのは、仲間同士で友人宅に遊びに行つたど
きのこと。テーブルの上に置かれたネスカフェ
の瓶。仲間の誰もがまだ飲んだことがなく、
皆でまじまじと眺める。その様子を面白が

り「飲んでみる？」と声をかけてくれた友人
のお母さん。二つ返事でうなづくわれわれ。
やがて台所から持ってきたお湯を注ぎ、いい
香りが流れる。差し出されたカップを口にし
た途端「ううえ〜ニツゲ〜なんだコレ〜」と一
斉にわめくヘタレ集団。「砂糖、砂糖！」と我
先にスプーンを一杯、二杯と入れて飲んで
はまた「ニツゲ〜」と叫ぶ。とうとう呆れて差し
出された牛乳をたつぷりと注ぎ、ようやく
飲むことができた。人の家で、ごちそうになり
ながらその反応はないだろう、という文字通
り苦い思い出。コーヒーの味をうまいと思え
るようになったのはいつ頃からだっただろう。

ホツェンプロッツの作者、ドイツ人のプロイ
スラーは、今から十年程前にこの世を去った
が、その本は、表紙カバーがカラーに変わった
ものの、今も書店の児童書の棚に並び、読み
つがれる。久々に開いて読んでみたら、あの頃
の苦い思い出まで甦った。いつもはガーガーと
音を立てる「コーヒーひき」が、今日は子供の
ころに聞いた旋律を奏でるようだった。

[右]大どろぼうホツェンプロッツ(旧版・新版)
プロイスラー作・中村浩三訳

[下]城藤茶店は地元商店街商品の
持ち込みOK(写真は欧風パン店
ブランドルのクルミレーズンパン)



ユミコの卒論コラム



みなさん、突然ですが「モミの木の集い」をご存知でしょうか？1982年12月24日。土浦駅前に飾られた10メートルにも及ぶモミの木に、蜜のごとく集まったたくさんの豆電球。その下ではまちづくりについての熱い話し合いが行われていました。参加したのは土浦の商店街の若手経営者だけでなく、市役所からも市長をはじめ、当時行われていた駅前再開発や高架街路事業、町並み再生整備などまちづくりを手掛ける関係部局の職員も。通りがかりの市民にもマイクをむけ、まちづくりの意見を求めます。話す息が白くくつきりと見えるほどの寒い中、甘酒やスープで体の芯をあたためながら、まちづくりに対する熱い話が盛り上がりを見せました。議論は深夜12時過ぎまで及んだのだとか。当時の土浦は駅前開発事業や高架道建設など大きな時代の転換期。色んな立場の方が土浦のビジョンについて語り合う。そんな意見反映の場は、きっとあれから40年たった今こそ必要かもしれませんね。



紹介したお店



城藤茶店

8:00-18:00(水曜日)
土浦市中央2-15-8
TEL.029-895-0283
<http://chiryudo.com/>



亀城公園に面した喫茶店。1936(昭和11)年築で、戦前に霞ヶ浦航空隊の海軍将校の住まいだった民家。城藤ブレンドコーヒー(¥450)、柴沼醤油を用いたおもちのワッフル(¥450)ほか。



ニコニコ珈琲

10:00-19:00(土曜日)
土浦市下高津1-21-50
TEL.029-823-0415
<https://nico-coffee.com/>



自家焙煎珈琲専門店。毎日焙煎したてのコーヒー豆の販売、卸、地方発送、輸入食品や雑貨なども販売。コーヒーのおいしさ、楽しさをもっと知るコーヒーセミナーも好評。



つちうら古書倶楽部

10:00-19:00(水曜日)
土浦市大和町2-1
TEL.029-824-5401
<https://www.rengado.net/>



東日本最大の売り場面積の古書店。30万点以上の古書・古本・古美術・骨董品などを販売・買い取り。日々書物が入れ替わるため、ゆっくりと宝探しのようにはぐれ、「出会い、めぐり会い」を楽しめる。

編集後記

本と珈琲と土浦を愛する有志が、夜な夜なとある喫茶店にあつまり、語り合ってきた本誌。お店を巡ったり、マスターのお話を聞いたりすることで、また一つ、土浦の新たな一面を知る今日この頃です。

とほん
とほん

発行日/2023.3.31

編集/ほんご編集部(稲葉・大沼・数野・葛西・工藤)

発行/地立堂 TEL.029-895-0283

※土浦まぢゼミ「若手交流・どんな本を読むか」をきっかけに作成しました。※文中の価格は税込込み



Instagram
[@hon_toko_tsuchiura](https://www.instagram.com/hon_toko_tsuchiura)

